

地域の底力

壺屋やちむん通り

沖縄県那覇市

「那覇まちま〜い」で
新たな魅力を発掘した
壺屋やちむん通りを訪ねて

沖縄にたびたび通った人でも

「壺屋やちむん通り」を知っているかどうか。

小さな通りの隅々まで魅力を掘り起こし、

まち歩きを楽しむを提供することで、

まちづくりの起爆剤とする試みが那覇市で展開されている。

海と琉球王朝だけではない沖縄の味わい方を提供し、

リピーター増大を狙って滞在型観光を打ち出す

那覇市の「那覇まちま〜い」で「壺屋やちむん通り」を訪ねた。



りゅうぎん総研 総研 首席研究員の
比嘉盛樹氏。那覇市の観光業
を取り巻く環境の変化と展望
を詳しく分析してくれた。

従来型

観光ビジネスの限界

東京から飛行機でおよそ二時間半の沖縄県那覇市。青い海と空が美しいリゾートの島沖縄の琉球王朝の伝統を受け継ぐ町。私たちは、ともすればステレオタイプな見方をしがちである。沖縄から発信される情報も、リゾートと琉球王朝に関するものが中心だった。

ところが最近、那覇市で新たな視点を持った観光振興やまちづくりに取り組む人々がいるという。その背景を、地元シンクタンクのりゅうぎん総研 首席研究員の比嘉盛樹氏に聞いた。
「それほど沖縄リピーターが多

くなかったところは、例えば三泊のうち二泊はビーチリゾート、最後の1泊は那覇市内という旅行形態が多かったのです。

しかし最近では沖縄は二回目、三回目というリピーターが多く、空港でレンタカーを借りて那覇を素通りし、リゾート地で過ごす方が増えてきました。

また二〇〇四年あたりから本土のビジネスホテルチェーンが那覇にたくさん進出してきています。限られたパイの食い合いになり、価格競争が激しくなっています。那覇の観光業界は厳しい状況が続いています」

沖縄リピーターの増加や競合の激化により、これまでのやり方は難しくなってきたというのだ。実際のところ那覇市内の状況はどうなのだろうか。

すぐ身近にある

観光資源に注目

中心繁華街の国際通りでは、電線地中化など歩道が整備され、修学旅行生で一見賑わっているように見える。だが、実はいろいろな

問題があると、社団法人那覇市観光協会の千住直広氏が言う。

「修学旅行生を除くと、沖縄に来る観光客の八割近くがリピーターです。那覇は、首里城と国際通りがイメージとして固定化されていると思います。そうなること、リピーターの方は『首里城には行ったから、那覇はもう行かなくていいよね』となってしまう。那覇にもう一度呼び込むためには、この固定イメージを変えないといけないと思うんです」

また、比嘉氏も地元目から指摘する。

「国際通りのお土産物屋さんや飲食店の経営者は本土の方が多くいんですよ。お客さんも本土の人ですから、お店が完全に本土向けになっているんですね。それも似たような造りが多い。それで地元人間が国際通りを敬遠してしまっています。今のままだと観光客の方と地元との交流が生まれないですね。横町に入らないと、素の沖縄は見えません」

那覇に人を呼びたい。しかし、固定イメージを超える魅力を伝え切れていない。表通りだけを眺



那覇市随一の繁華街・国際通り。(写真提供：那覇市)

めると、リピーターにとって本当に魅力的かどうか疑問がある。そんな課題を乗り越えようとして誕生したのが、「ガイドと歩く那覇まちまじい」である。「まちまじい」とは琉球言葉(沖縄方言)でまち歩きのこと。たくさん観光資源を持ちながら、十分開発されてこなかった那覇市内を、ガイドの案内で歩いてみようという企画である。

最近ではテレビでもまち歩きものが大人気。立派な名所旧跡を回るのはなく、人々が暮らす普通の町の中に思いがけない出会い

表「那覇まぢま〜い」コース一覧

(2012年4月現在)

コース名	所要時間(分)
那覇の市場 迷宮めぐり	90
壺屋のツボ やちむん通りとすーじぐわーめぐり	90
しかまち・カンパチ・栄町市場めぐり	60
小禄に残る古道を歩く	90
風水のムラ 久米村めぐり	120
波の上チャンプルータウン	120
首里城〜琉球王国への誘い〜	90
首里城 女ものがたり	120
首里城 男ものがたり	120
世界遺産 玉陵と金城町・パワースポット巡り	120
開運 首里十二支巡り	210
ペリー上陸の地 泊を歩く	120
世界遺産 識名園 魅力と謎	90
ゆいレールと軽便鉄道	120
那覇新都心 〜もう一つの顔を訪ねて〜	120
久茂地川道遙〜12の橋めぐり〜	120
奥武山と山下町すーじぐわーま〜い	90
首里 城下町物語〜湧水を訪ねて〜	90
早起きは三文の得 農運市場ま〜い	60
楚辺は昔、海のそば?	120
国際通りのワキ道ヨコ道ウラの道	90
安里・牧志の路地裏歴史さんぽ	90

や物語、おいしい食べ物などを発見していく内容だ。普段自分が生きている地域でさえ、実は宝物のような発見が隠されていることに多くの人が気付いき、魅力を感じ始めている。国際通りは歩いた、首里城など琉球王朝の名所見学もした。そういう人たちが再び那覇に誘うにはまち歩きを楽しむを提供すればよいのではないかと。千住氏は、従来のイメージを変えて新たな魅力を打ち出していきたいと言った。

「那覇市は琉球王国の都として本土や中国、東南アジアと交流し、

その中で育まれてきた歴史の厚みがあります。また、庶民文化も分厚い。七〇、八〇のおバアも現役で仕事をされていて、市場も活気がある。歴史や文化を掘り起こしていけばいろいろなまち歩きを楽しみが見つかると思います」観光協会が運営する「まぢま〜い」のパンフレットを見せてもらった。「那覇まぢま〜い」のきっかけともなるまち歩き企画がスタートしたのは二〇〇八年度。コースは「ガイドと巡るやちむんのまち・壺屋ツアー」一つだけである。それが二〇一二年四月ではレ

実際に「まぢま〜い」してみよう。事前予約すれば一人でも催行してくれるし、当日飛び込みもOKなので、気軽に参加できる。初心者向けコースとしては「那覇の市場 迷宮めぐり」などいろいろあって目移りするが、今回は春に向けて縁起もののシーサー

壺屋焼とやちむん通り

ギョウラーコースだけで二二も用意されている(表)。新たな魅力の掘り起こしについて、関係者が知恵を絞った結果の急速な拡充だ。

で有名な壺屋焼をテーマに選んだ。コースは「壺屋のツボ やちむん通りとすーじぐわーめぐり」(所要九〇分)である。那覇に何度か通っていても、やちむん通りは知らない人が多いに違いない。琉球言葉で「やちむん」は焼物を指す。「すーじぐわー」は筋道である。まさに壺屋焼の小路巡りである。繁華街からは意外なほど近い。国際通りから歩いて一〇分、中心部にある牧志公設市場からは五分程度。喧騒を逃れて壺屋の町に入ると、琉球王国時代から連続と続く壺屋焼の工房が軒を連ねて



那覇市観光協会の千住直広氏。宮崎県から沖縄に移住した。外から沖縄を客観的に見る目を活かしながら、「まぢま〜い」の企画を次々に立案して観光振興に役立っている。

那覇市立壺屋焼物博物館館長の高里浩氏。博物館前が「壺屋のツボ やちむん通りとすーじぐわーめぐり」コースの集合場所で、博物館に立ち寄る参加者も多い。



いる。那覇市立壺屋焼物博物館館長の高里浩氏は、

「先の戦争で那覇市内は壊滅的な被害を受けました。しかし、この壺屋地域に限っては奇跡的に戦火をまぬがれて、戦前からの古い赤瓦であったり、すーじぐわー(筋道)という細い路地や石垣が残っています。沖縄・那覇の原風景が今でも見られるのです。

壺屋焼は一六八二年に琉球王朝が琉球国内の三つの窯場を壺屋地域に統合し、今年で三三〇年と

いう長い歴史を持っています。その中で変わった部分もあります。が、技法的には昔からのものを守り続けていますね。博物館でも古代の焼物から、琉球王朝が貿易をしていた時代のもの、戦時中物資がなかったころのもの、さらには現代の作品まで時系列的に展示しています」

と話してくれた。

ツアーの集合場所はまさにその那覇市立壺屋焼物博物館前である。そこで女性のまぢまぢいガイドさんが待っていてくれた。時折冷たい風が吹く中、ガイドさんは半袖にはだしのサンダル履き。「体から熱気が出ているからこれでも暑いくらいですよ」とガイドさん。何だかこちらまで元気になった。

観光協会の千住氏は、

「まぢまぢいガイドは、皆この土地が好きで、那覇のことを勉強し、歴史や伝統を伝える喜びを感じています。過去だけではなく那覇の現状や未来を伝えていく役割も果たしていきたいですね」と意気込んでいた。どうやら期待できそうだ。

やちむん通りの路地を巡る冒険

いよいよスタート。参加費一〇〇〇円(小学生以下無料)を直接支払い、地図と絵はがきなど資料一式をもらおうと、「さあ行きましよう」と言うガイドさんの声に導かれて歩き出す。

石畳の道をゆったりとした足取りで歩くと、程なく琉球王朝時代の登り窯跡(南又窯)に到着。遠目には小さな丘に見えるが、長く使われていない人工遺物だ。半ば崩れかけた屋根に赤い瓦。形あるものは必ず滅びる。かつて遺骨を納めるために用いられたためにも傍らに置き去りにされている。これは誰のために作られたものだろうか。坂を上り切ると、そこには南国の木ガジュマルが茂り、緑が濃い。思わず天を仰いで深呼吸した。

その後、すーじぐわー(筋道)に入る。そこはバイクがようやく通れるくらいの路地だ。両側の生け垣が青々と迫っていて見通しはよくない。歩いているのは私たちと近所の猫一匹。この道はどこ



上／那覇市中心部にある牧志公設市場も「まちま〜い」の人気コース。下／「ベリー上陸の地 泊を歩く」コースでは、外国人墓地を訪ねる。



壺屋地域は沖縄戦の戦火を奇跡的にまぬがれた古南又窯。壺屋地域は沖縄戦の戦火を奇跡的にまぬがれた古い建物が残っている。



に続くのだろう。ちょっとしたミステリー・ツアーだ。
ドキドキしながらついて行く
と、次は壺屋焼体験工房だった。
自分一人でふらりと入るには少

し勇気がいるが、今日はガイドさんがいるから平気だ。体験工房では、本土からの観光客のグループがシーサー作りを体験中。アドバイスされながら、思い思いのシーサーを作っている。傍らでは赤ちゃんを抱っこしたお父さんが、自分の作業そっちのけでお母さんの奮闘ぶりをビデオで撮影している。工房の人に聞くと、シーサーの乾燥・焼成が終わって、手元に届くのは一カ月後だという。あの家族は、一カ月後に届くシーサーを手元に置いてビデオを見返し、幸せな時間をもう一度味わうのだろうか。
壺屋焼の工房も見学できる。涼

しい季節には、窯からの熱が心地よい。工房には赤みを帯びた陶土のほか、半製品、完成品がそこかしこに置かれている。すべて壺屋焼特有のふつくらとした素朴なテイストの焼物だ。温かみがあり、尖ったところがどこにもない。じっと眺めているうちに一つ欲しくなった。コース終点の壺屋陶器会館で何か買おうか。
石垣、古い井戸、建物と至るところに見どころがある。「ここを見てください。シーサーですよ」というガイドさんの声。すーじぐわー(筋道)の所々にシーサーがひっそりと紛れるように置かれている。一つ一つ表情が違って面白い。誰かに似たシーサーを見つけて、ひそかににんまり。記念にカメラで撮っておいた。魔よけの石敢當いしがんとくが置かれたつじもあちこちにあった。
まち歩きで目にするのは、ありがちな観光スポットと違って、い



ずれも何げなく歩くと見過ごしてしまいそうなささやかなポイントばかりだ。しかし、何か面白いものを見つけてやろうと初めから「ウの目タカの目」、道に迷わないように「地図とにらめっこ」では疲れてしまう。
その点、「那覇まちま〜い」ではガイドさんが親切に教えてくれるので安心だ。参加者は初めはただついて行けばいい。そのうちに自分なりの発見と感動が出てくる。リラックスして過ごせる上に、予備知識なしでもまち歩きを深く味わえるのは大きな魅力だ。
沖縄が大好きで年間数回訪ねるといふ参加者の鬼木真理子さん(海外在住)は、
「まち歩きが好きなので、今回

筋道は静かな空気を漂わせていた。

焼物店や工房、喫茶店などが並ぶ壺屋やちむん通りには、美しく石畳が敷かれ、ゆっくりと散策や買い物を楽しめる。



のまちま〜いに参加しました。道端のシーサーの口からガジュマルみたいな木が生えているところなんか、教えられないと気付かないですよ。楽しかったです。いろいろなバリエーションが用意されているので、次の機会にも別のコースを利用したいですね」と話してくれた。たびたび沖縄に来ていたリピーターも、訪れるたびに新たな発見がある。楽しみは尽きないのだ。

意外なことに、「那覇まちま〜い」のファンには地元の人も多いという。千住氏は、

「実は参加者の六割が地元なんです。まだ本格的に始めて一年です。協会としても地元向けのPRにも力を入れています。沖縄

の黄金言葉（ことわざ）で『きらま〜いししがまちげ〜いらん』（慶良間島は那覇から見えるが、自分のまつげは見えない）と言いますが、日ごろ見過ごされがちな地元の良さを住民の方にあらためて認識してもらって、その人たちがまた県外に発信してくれることを期待しています。

まち歩きというのは観光的な要素とまちづくり的な要素があると思うんです。まちづくりでは、地域の人が参加してあらためて地域の魅力に気付き、さらに愛着を持って自分たちが住んでいるまちを良くしていこうと思うことが大事。ガイドさんがいて観光客の方と一緒に回ると、たぶんそれが顕著になるでしょう。観光客から『那覇ってこういうところがいいよね』などと言われると、地元の人は嬉しくなるわけですね（笑）。そこから『じゃあもつとまをきれいにしなくて』とか『花を植えようか』というところまでつながっていかばいいと思います。今後は地域の方々との連携も重要になってくると思います」と話す。

地域との協力以外に、那覇空港と首里を結ぶ「沖縄都市モノレール（愛称・ゆいレール）」との協力関係も模索中である。ゆいレールの駅は「那覇まちま〜い」の集合場所に指定されることが多い。沖縄都市モノレール株式会社・仲宗根智氏は、

「集合場所に行くために、普段利用されない方でもモノレールに乗っていただいているので、ありがたいです。高架を走るモノレールからだと、那覇の町並みがいとも違って見えます。観光客や市民の方にはモノレールに乗って新たな発見をしてほしいですね。今後のコース拡充を楽しみに

しております」と話している。

若者の力でぬくもりあるまちづくりを

まちづくりにおいては若者も活躍中である。壺屋焼を作る窯元でやちむん通りの中に幾つかの店舗を運営している有限会社「育陶園」当主の長女で企画・販売・業務統括責任者の高江洲若菜さんは、やちむん通りを若い感性で発展させようと力を尽くしている。彼女は最初は家業に就く意識はなく、短大の保育科に進んだ。壺屋やちむん通りは以前のまち



那覇空港と首里を結ぶ「ゆいレール」の各駅は「まちま〜い」の集合場所にもなっている。

上／若い感性で壺屋やちむん通りを活性化させている、壺屋焼の窯元「育陶園」の高江洲若菜さん。下／「まちなみ〜い」では工房見学もできる。



もらう。

「育陶園」の工房は「壺屋のツボ やちむん通りとすーじぐわーめぐり」のコースにも入っている。作業の最中の職人さんたちは非常に親切で、自分たちが手掛けているものの説明を丁寧にしてくれる。

ふと気付くと、小さな女の子が私の隣でロクロを回すのを見ていた。尋ねると、近所の小学生だった。地元の子供たちは、まるでわが家のように自由に工房に入り込んでいるという。都市部ではとうに失われてしまった光景だ。りゅうぎん総研の比嘉氏は、

「今ある沖縄の文化や生活を見せることも意識していけば、もっと広がりが見られるのでは」と話していた。工房での交流は

確かにその広がりを感じさせた。

日本、中国、アジア、さまざまな文化が一つに溶け合い、南国の風土に根差した固有の琉球文化。昔ながらの地域社会。その中で暮らす人々の、飾らない温かさ、土地への誇り、未来への意思。「那覇まちなみ〜い」を通じて見えてきたものは、そうした目には見えないものだった。

「育陶園」の新しいコンセプトづくりや経営にかかわりながら、那覇市の「壺屋やちむん通り会」活性化事業で予算を付けてもらい、自分が中心になって引っ張っていく立場となった。予算は全部で三〇〇万円ほどという。

「付けていただいたのは基盤づくりと具現化の二種類。基盤づくりでは外部から講師を招いてアドバイザーを受けながら、これから壺屋やちむん通りをどう活性化していくべきか考えていきます。具現化ではホームページなどで外部への発信を行っていきます」

誰に対して何を伝えたいのか。活性化事業にかかわるメンバーが本部に集まって議論し、まとめた答えを壺屋やちむん通り会の役員や通りの人々に了解して

並みを蘇らせようと一〇年ほど前から整備が進んだが、生まれてからずっと暮らしていても、「もともとここで仕事をするつもりがなかったの、変化していくのも全然意識していませんでした」

と言う。最近県外に出掛けることが増え、あちこちで「どこも町並みや売り物が同じようになってしまっ、特徴がないことが悩み」という話を聞くようになった。

「壺屋やちむん通りは独特で個性があると思います。焼物も地域の特性を活かしている。それを持つているということは凄く宝なのだと思うようになりました」

